

—関連施設だより—

“開院 75 周年” を迎えて

蜂谷 将史

国家公務員共済組合連合会横浜南共済病院

Reach the Opening of a Diet Session 75th Anniversary

Masashi Hachiya

Federation of Natl. Public Service and Affiliated Personnel Mut. Yokohamaminamikyousai Hospital

横浜南共済病院前身は、昭和7年10月20日に横須賀海軍共済組合病院が浦郷に分院を開設したことが始まりであった。そして、昭和14年6月に横須賀海軍共済病院浦郷分院が、現在病院がある六浦地区に移転され、横須賀海軍共済組合病院追浜分院として設置され、昭和16年4月21日追浜海軍共済組合病院として分離独立してから数え、本年度で満75周年を迎えました。

75年を振り返りますと、戦前は横須賀海軍航空隊の航空技術廠とともに歩んだ道のりであると思います。当時の航空技術廠は世界最先端の研究や技術を行っていた組織であったようで、そこには、戦後、わが国の工業技術の発展を支えた逸材が在籍しておりました。代表的な方は、元ソニー会長の森田昭夫氏、国産ジェットエンジン開発の第一人者永野治氏、新幹線の車体開発の中心となった三木忠直氏、世界で最初に内視鏡を開発した深海正治氏といった方々であります。

航空技術廠は、昭和7年に開設され、最終的には追浜の本廠、釜利谷の支廠と合わせると職員、工員合わせて3万人以上が在籍した巨大な組織でありました。そして、当院はそれらの方々の医療を担っていました。

戦後は、幸いにも病院は空襲を受けなかったこともあり、医療施設はほぼ無傷に近い状態でありましたが、社会の混乱、経済疲弊による極度のインフレ、医療機器や医療材料の致命的な不足といった病院運営の存立危機が迫っていたものと思います。このような時代も、病院職員は歯を食い縛りながらも地域住民に対して医療を提供してき



連絡先：蜂谷将史 〒236-0037 神奈川県横浜市六浦東1-21-1

URL：http://www.minamikyousai.jp/

Journal Website (http://www.nms.ac.jp/jmanms/)

ました。

昭和 25 年、旧令特別措置法により財団法人共済協会の権利義務は、国に引き継がれ、病院の管理運営は国家公務員共済組合に委ねられました。それ以後は、国民皆保険制度、老人医療費無料化等の医療保険制度の整備により、医療需要の喚起に支えられながら、高橋金次郎院長の基に、病院近代化の基礎を築いてこられました。そして、昭和 56 年には山田勝久院長が就任され、横浜南共済病院の近代化に尽力されるとともに、山田勝久先生の類まれなリーダーシップにより、医療内容の充実、向上に努め、名実ともに横浜南部、横須賀北部、逗葉の基幹病院として、この地域の雄たる病院に発展させたものであります。

そして、平成 18 年 4 月に第 7 代病院長を拝命し、医療を取り巻く厳しい環境を乗り越えられるよう、5 つの基本方針 1. 「地域の中核病院として急性期医療を実施する病院」 2. 「救急医療・診療科別によるセンター化・手術部門の強化」 3. 「チーム医療体制の確立」 4. 「安心・安全で良質な医療の提供」 5. 「地球環境対策への先進的な取り組み」に基づく更なる病院設備近代化や医療水準の向上を目指しました。

そして、平成 23 年 3 月に新病棟建築を着工することができました。病棟の療養環境に配慮したアメニティー面の充実と、病院の診療機能の核となる、手術、救急、集中治療、放射線検査・治療、検査等の部門の集約化を図りました。工期は敷地内でのスクラップアンドビルド方式のため計画当初より 5 年にわたる長丁場でありました。加えて東日本大震災等の影響により竣工が遅れ、本年 11 月に竣工する予定です。

また、高度急性期に対応した医療水準向上のため人材の採用・教育に力を注ぎ、本年 4 月 1 日現在、職員数 1,167 名、医師数 178 名の診療体制を実現しました。こうして、高度急性期医療を展開する病院としての機能を完備することができました。また、おかげさまで、本年 4 月には救命救急センターの指定、DPC II 群病院の認定を受けることができました。

日本医科大学には、当院血液内科をご支援いただき、横浜南部地区での中心的な血液疾患治療の拠点病院として運営できていますことを心より感謝申し上げます。

(受付 2016 年 6 月 22 日)